

第10分科会

子どもの主体性がいきる

保育者のかかわり

助言者	植木 章子 (鹿児島キャリアデザイン専門学校非常勤講師)
司会者	鮫島 和代 (やはた幼稚園)
問題提起者	種子田美紀 (研明舎幼稚園)
記録者	小濱真由美 (研明舎幼稚園)
記録者	前田恵里奈 (研明舎幼稚園)
ホスト	武田 真一 (太陽の子幼稚園)
ホスト	森 章子 (聖母幼稚園)
運営委員	義永 淳子 (鴨池幼稚園)

【研究課題】

保育実践

【研究・研修の視点】

社会の大きな変化や人々の意識や価値観の多様化に伴い、子どもの育ちをめぐる環境が著しく変化し、家庭や地域社会における教育力の低下が指摘されている。また、一昨年から新型コロナウイルス感染症の感染拡大に伴い、幼稚園、認定こども園における教育・保育活動も中止したり、規模を縮小したりしなければならないのが現状である。このような状況において、新しい時代を生きる子どもたちのために、幼稚園、認定こども園における日々の教育・保育の実践の質の向上が求められている。

幼稚園教育要領、認定こども園教育・保育要領には子どもの主体性を大切にする教育・保育が示されている。子どもは自ら主体的に環境にかかわったり、環境から働きかけられたりする関係性の中から主体性を育んでいる。しかし、その環境が発達に応じたものでなければ、また活動に対して適切な指導が行わなければ、子どもの主体性を育てることにはつながらない。幼児期の主体性の育成は未来を生きる土台づくりである。

子どもの主体性が生かされる教育・保育実践を展開するためには、子どもを見る目、寄り添う心など保育者としての姿勢とともに、環境の構成、遊びの内容と広がり、的確な記録等の知識や技術を高める必要がある。また、一人一人の発達の実情を捉えたうえで、具体的なねらいや内容を設定し、それらを達成させるための適切な環境を構成していく必要がある。保育者は、環境にかかわって様々な活動を生み出していく子どもたちの姿を捉えながら、その状況に応じて多様なかかわりをしていかなければならない。

【研究・研修の概要】

1 研修・研究テーマの内容

本園は少人数の園であり、保護者との連携を図りながら子どもの個性・発達状況をよりきめ細やかに捉えたり、子どもの思いを小集団の中で共有したりしながら教育・保育を実践してきている。また、職員同士の連携、子どもや保護者との連携を深めながら教育・保育を実践してきている。

そこで、様々な個性を発揮する子どもの実態を的確に捉え、その実態に即した環境構成・支援することや子どもが主体的に活動するための個をいかす小集団での保育や子どもの思いに即した支援について、職員相互・職員と保護者との連携を踏まえながら、保育者のかかわりを研究していく。

事例1…個の思いを共有し、主体的に活動する小集団における保育者のかかわり（2例）（年長児）

事例2…発達に個性が見られる子どもに対する保育者のかかわり（2例）（年少児）

2 研究・研修の計画

令和4年度

- ・一人一人の個性・発達状況を的確に把握し、実態に即した環境構成・支援を考える。
- ・個別の支援のあり方や主体性を生かすための小集団への保育者のかかわりを考える。

令和5年度

- ・異年齢保育を通して、一人一人の個性を認め、子どもが成長に応じて主体的に活動していくための保育者のかかわりを考える。
- ・子どもたち一人一人の成長を促すための保護者との連携のあり方を探る。

3 研究・研修の実践例（…子どもの活動等、⇒…教師の働きかけ・かかわり、◎…成果・変容）

(1) 個の思いを共有し、主体的に活動する小集団に対する保育者のかかわり（年長児）

ア) すごろく遊び

- ・年度当初から、ぐるぐるじゃんけんや研明舎バスケット等の集団でのゲームを楽しんだ。
- ・意図的にひらがな積み木をおもちゃ箱と一緒に並べておくことで、ひらがな積み木を並べて遊んだり、自分の名前に入っている文字から新たな言葉を見つけたりしながら楽しんだ。
- ・ゲームの経験や文字への関心から「自分たちですごろくを作りたい」とA児が発案した。
- ⇒ A児の発案に共感した子どもたちと一緒に、制作に必要なもの、制作方法、遊び方を話し合い、見通しを立てながら制作活動を進めていった。
- ・子どもができることと保育者が支援することを見極めながら、できるだけ子どもの手によるすごろく作りを心がけた。
- ◎製作したすごろくを自分たちで楽しむとともに、他の学年とも一緒に楽しむことでより一層の充実感・達成感を味わっていた。

イ) 逆上がり

- ・体育遊びで、鉄棒の前回りや逆上がりの練習を行った。
- ・自由遊びの中で、楽しそうに鉄棒遊びをして、B児が逆上がりまでできるようになった。
- ・「B君みたいに逆上がりができるようになりたい」という思いから、逆上がりの練習をする子どもが増えていった。
- ⇒ 子どもへの称賛、腰を支える帯の活用、踏切足と腕の使い方の支援等個別指導を行った。
- ◎担任を始め、全職員が声かけ・称賛することで練習に励んだり、できるようになった子どもが他の子どもを励ましたりなど集団の雰囲気がよくなってきた。
- ◎逆上がりができるようになったことで、自信をもって他の活動にも挑む姿が見られた。

(2) 発達に個性が見られる子どもに対する保育者のかかわり（年少児）

ア) ・言葉でのコミュニケーションが未熟で、本児の思いをくみ取ることが難しかった。

- ・こだわりが強く、周りの様子に左右されることなく、一人で遊ぶことが多かった。
- ⇒ 本児の思いを大切に一緒に楽しんだり、言葉かけをしたりしながら思いを共有することに心がけた。

イ) ・運動会練習の経験から他の子どもとのかかわりを意識したり、園庭へ出て体を動かしたりするようになり、自分でやろうとする姿や友達のまねをする姿も見られるようになった。

- ⇒ 無理強いせず、本児の思いやその時の状況を受けとめながら、やったこと・できたことを褒めたり認めたりした。
- ◎これまでの経験やかかわりを通して、周りの子どもたちから受け入れられ、認められることで、安心してみんなの中に入れたり、優しく接し、我慢する心が育ったりしてきた。
- ◎機会ある毎に保護者との話し合いの場を持ち、子どもの様子を話したり、家庭での様子を聞いたりすることで、子どもの成長を確認し合うことができた。

4 まとめ

子どもの思いが集団に波及し、集団としての活動が進行していく中での保育者のかかわりや発達に個性が見られる子どもに対する保育者のかかわりについて研究することができた。また、日々の保育・教育活動においては担任のかかわりとともに全職員による励まし・称賛の声かけ等の大切さや保護者との連携の大切さにも改めて気付かされた。少人数という本園の特色を生かすために、子どもの思いをもとにした教育・保育、保護者との連携にさらに努めていきたい。

5 今後の課題

- (1) 保育者は小さな集団では子どもの思いをある程度感じ取ることができるが、小学校等の大きな集団になったときにも自分の思いを伝えられるようなかかわりをしていく必要がある。
- (2) 子どもの成長を十分に促すために、子どもの発達の特性に応じた支援のあり方や保護者の理解をより深めるような手立てを考えていく必要がある。

【討議の柱】

- ・ もっとやってみたい、こんなこともしてみたいという思いを引き出させる環境はどうあるべきか。
- ・ 保育者と子ども・保護者の信頼関係を深めるための手立てはどうあるべきか。

【討議内容】

◎討議の柱に沿って、8つのグループに分かれ、有意義な情報交換が行われた。

- 1 もっとやってみたい、こんなこともしてみたいという思いを引き出させる環境はどうあるべきか。
 - ・ 子どもたちの流行りの遊びを観察して、その遊びをどのように発展できるか考えることを大切にする。
 - ・ 活動をする際の保育者の導入時の働きかけが大切であり、子どもの発言を引き出す等興味を持てるしかけを工夫する。
 - ・ 自分たちで遊びを考えたり発展させたりと、主体的に取り組める活動を行う。意欲に差があったり、もめたりすることもあるが保育者が提案したり、子どもたちで話し合いの場を設けたりすることで、みんなが納得でき、達成感や楽しさを味わうことができる活動へ繋げていく。
- 2 保育者と子ども・保護者の信頼関係を深めるための手立てはどうあるべきか。
 - <子ども>
 - ・ 状況に応じて、一人一人の子どもとのかかわり方を考慮していく事が大切であり、子どもと同じ目線でかかわる。
 - ・ 見てもらえている安心感もてるように、子どものSOSを見逃さない。
 - ・ 子どもたちと全力でかかわり、楽しさを共感する事で愛着関係を築く。
 - <保護者>
 - ・ 連絡帳や活動の写真を提示する等、お互いに子どもの成長を共有し、伝え合い、見守っていくようにする。また、大切な事は直接伝えるようにする。
 - ・ 子どもの様子を伝え、情報を共有する。良いことも、悪いことも伝えることが必要であり、その時の保育者の対応を伝え、家庭でもフォローをしてもらう等の連携を図る。

【助言者のまとめ】

助言者：植木 章子 先生（鹿児島キャリアデザイン専門学校非常勤講師）

「子どもの主体性がいきるための保育者のかかわり」の10分科会の主題についてのまとめ

- ・ 1つ目は、保育者は日々の保育を展開する時、「子ども理解」をしっかりとすること。
- ・ 2つ目は、子どもが遊び込むための環境の状況の整備を行うことである。



1 「子ども理解」について

保育者は日々の保育を展開するとき、子どもを理解しながらの保育実践を行うことが大切である。また、一人一人の幼児が教師の援助のもとで主体性を発揮して活動を展開していくことができるような、幼児の立場に立った保育の展開である。活動の主体は幼児であり、教師は活動が生まれやすく、展開しやすいように意図をもって環境を構成していく必要があり、計画的な教師の考えがなければならない。

幼児が何に関心を抱いているのかを知り、何に意欲的に取り組んでいるのか、あるいは取り組もうとしているのかということを考え、そして、何に行き詰まっているのか等を捉える必要がある。また、子どもが経験していることとその内面を捉え続けることが大切であり、子どもと生活を共にしながら、子ども理解に努めることが大切である。

<評価という視点のポイント>…幼稚園教育指導資料集第3集「幼児理解と評価」参照

- ① 幼児の生活する姿から、その幼児の心の世界を推測してみる。
- ② 推測したことを基にかかわってみる。
- ③ かかわりを通して、幼児の反応から新しいことを推測していく。
- ①・②・③の循環の中で、行動の意味が見えてくる。また、子ども理解と共に保護者との信頼関係を築き、うまくコミュニケーションをとることで、子どもの望ましい発達を促す生活が実現でき、保育が充実してくる。

<子どもの何を理解するかの手立て>

- ① 子どもの発達の特徴を理解する。
- ② 子どもの基本的な生活習慣を理解する。
- ③ 子どもの遊びを理解する。
- ④ 子どもの人間関係を理解する。

これらの点に留意して観察していれば、次の保育計画にいかすことができる。

2 「環境構成」について

子どもにとって遊びは学びである。幼児の遊びを大切に、やってみたいと思えるようにすると共に、試行錯誤を認め、時間をかけて取り組めるようにすることが大切である。

環境とは「人・物・自然・場所・時間・空間」等子どもを取り巻く全てであり、保育者は日々の保育の中で、遊びの環境を整えることが大切である。子どもにとって保育者の言動が大切になり、保育者の言動は子どもたちに安心感を与えるものである。「遊んでくれる先生・気持ちよくなってくれる先生・寄り添ってくれる先生」と集団では人的環境の教師が、子どもにとって大きな存在になる。また、それぞれが持っている知識を再構築して新しい発見をする場所でもあり、仲間関係を結ぶコミュニケーションの場でもある。子どもたちが、それぞれの発達に必要な体験を得られるような状況をつくり、必要な援助を行いながら、子どもたちとのやり取りを遊び心を持ちながら楽しんでいくことが大切である。子どもの経験・体験をよく知り、援助しなければ子どもの遊びは発展しないため、知恵・工夫・配慮が必要であり、色々な試しを子どもと一緒にやってみることが大切である。

「環境に主体的にかかわる・さまざまな活動を楽しむ・しなければならないことを自覚する・自分の力で行うために考えたり、工夫したりする・諦めずにやり遂げて達成感を感じる・自信を持って行動する」等、「幼児期の終わりまでに育ててほしい姿（10の姿）」の自立心の具体的視点を意識し、幼児の特性や一人一人の発達の段階を読み取り、そして保育環境を正確に構成していく。子どもの気持ちに寄り添い、読み取る、汲み取る姿勢を大切にしたい子ども理解、子どもの主体性がいきるかわかりが展開できる環境づくりに努め、保育実践をしていくことが望ましい。



助言者のまとめ